

人と人とのつながりの中で

石塚美穂子

(保育士)

お茶の水女子大学附属いずみナーサリーには、〇歳から三歳未満児の三〇人ほどが在籍しています。週一日〜週五日と利用が選択でき、出会う友達も日によって異なります。また、子どもたちは、一年を通してさまざまな時期に入所してきます。友達を受け入れながら人とのかわりが広がっていく子どもたちの様子や保育を、日々の記録と記憶をたどりながら振り返っていききたいと思います。

新しい友達を受け入れる

冬の寒い時期、新入園児N子（一歳三か月）とM

子（一歳三か月）を迎えました。四月からナーサリーで過ごしている子どもたち数人が、二人を指さして、にっこり笑ったり、頭をなでたりします。「新しいお友達だね」の気持ちを表し、迎え入れているように感じました。

N子とM子は不安で朝から泣いていますが、E子（二歳四か月）は、いつものように、おもちゃの棚の引き出しを引っ張って中の物を取り出したり、おままごとをしたりして遊んでいます。時折、泣いている二人を見ては遊び、そのしぐさは、「遊ぶと楽しいよ」と語っているように感じました。最初は大

石塚美穂子（いしづかみほこ）

埼玉県公立保育園保育士。元お茶の水女子大学附属いずみナーサリー保育士。

人のひざの上で泣いていたN子とM子でしたが、E子の遊ぶ姿を見て、ふと泣きやむのです。

その後は、N子がおもちゃの棚まで歩きだし、M子も追うように立ち上がり、遊び始めました。『気に掛けてくれる友達が、そばにいる』という温かい空間は、保育者が掛ける優しい言葉よりもうれしく、安心できるものなのかもしれません。

翌月、もう一人、T男（一歳〇か月）を迎えました。やはり新しい環境に不安を感じ、泣いています。

そんな時、T男の肩を優しくなでてくれたのは、先月入所したばかりのN子とM子でした。T男は、「あれ？ 今のは誰？」という表情で泣きやみます。音の鳴る積み木を気に入ったようで、自分で振り、カラカラと鳴る音を聞いては笑う姿が増えてきました。

M子は、T男が泣くと、その積み木を持ってきて

くれるようになりました。お気に入りのおもちゃがあることに気がついたのではないかと思えます。

それでも泣きやまない時は、違っておもちゃも持ってきて「これはどう？」と言わんばかりに渡してくれているのです。少し前には泣いていたN子とM子でしたが、今では友達を思う気持ち芽生えているのを感じ、とてもうれしくなりました。温かい心は、人から人へと受け継がれながら、はぐくまれていくのではないのでしょうか。

友達の思いを受けとる

いずみナーサリーの生活にも慣れ、友達と一緒にいること、かかわることが楽しくなってきた子どもたちですが、表現力が十分でないために、おもちゃの取り合いも多くなってきました。

そこで、今の子どもたちに合ったおもちゃはどんなものだろうか、一人ひとりが十分に楽しめるよう

に数はそろっているだろうか等、室内環境を見直しました。また、保育者の動きや言葉も大切な環境の一つとして、丁寧なかかわりを心掛けました。おもちゃが欲しいという気持ちや、取られてしまった子の気持ちも言葉にしながら、心地よく遊べるようにと願い、保育をしていく中で、少しずつ子どもたちの姿が変わり始めました。

一歳五か月になったE子が布のカバンを腕にかけ、室内を一周し、お出かけごっこを楽しんでいます。その姿を見て、I男（一歳三か月）も、まねして遊びたくなったのでしよう。「ちょうだいな」の気持ちで、カバンを引っ張ろうとしていました。その時E子は、もう一つのカバンを棚に取りに行き、「どうぞ」と渡したのです。I男は受け取り、にっこりしてE子の隣に並び、「バイバイ（お出かけしてきます）」と手を振り、二人で歩きだしました。

E子は、「私のカバンを取らないで！」と怒るので

はなく、一緒に遊びたいというI男の気持ちを感じ取り、カバンを取ってきてくれました。保育者が間に入らなくても自然な形で遊びが始まった、ちょっとしたひとコマですが、そこにはE子の心の育ちを感じました。

子どもたちは、人とかがわる中で、怒ったり、我慢したり、笑ったり等、さまざまな気持ちを表します。その時に、自分の思いを受けとめてくれる大人や友達が身近にいて、安心して過ごせること、それが育ちにつながっていくのではないのでしょうか。

I男は、「カバンを持ち、遊びたい」という思いをE子に受けとめてもらいました。その経験は、次の遊びのエネルギーとして生まれ変わっています。I男は、友達が近くに来ると、「どうぞ」の言葉を添えておもちゃを渡し、一緒に遊ぼうとしているのです。少しずつ友達とのかかわりが広がっていくのを感じました。

ありがとうの気持ちから心が通う

N子がチェーンリング（プラスチックの輪をつなげたおもちゃ）を容器に入れて遊んでいました。それが欲しくて手を伸ばしたE子。一度は、渡すまいと必死で押さえたN子でしたが、少し考えた表情をし、「はい（どうぞ）」と渡しました。E子は笑顔で何度もお辞儀をして、「ありがとう」の気持ちを表しています。N子も「どういたしまして」とでも言うように一緒に何度もお辞儀をして笑っています。言葉はなくても、二人の表情から、心が通い合っているのを感じました。その後、N子は自分でおもちゃを持ってきて遊び始めました。

普段、自分の思いを主張することが少ないN子が、このおもちゃは私のもの！と主張していたので、このまま自分の思いを通してほしいと私は思っています。

ました。E子には同じおもちゃがあることを伝え、それぞれが心地よく遊べることを願っていましたが、N子は自分の意思でおもちゃを貸すことを決めました。貸したその先には、二人で気持ちを通い合わせ、ほほ笑いあう、幸せな時間があつたのです。もし、私が先走って声を掛けていたら、こんな素敵なかわりはなかっただろうと思うと、保育者のかかわり方一つで、子どもの経験がどれほど大きく変わるか、そして、今まで私は、子どもたちの本当の思いに気づき、応えることができていたのだろうか、と考えさせられました。

こんなに小さな子どもたちであっても、相手の思いを感じ、応えようとしています。その時、その瞬間の、子どものしぐさや表情から、心の動きをしっかりと感じ取り、小さな変化に気付けることが大切だと感じています。子どもの思いや、保育者の願いを丁寧に重ねながら、育ちを見守りたいと思います。